第 8 章　田中啓爾の戦前期における地理教育観

第 1 節　田中啓爾に関する先行研究と経歴

第 1 項　田中啓爾に関する先行研究

田中啓爾は，第二次世界大戦前，東京高等師範学校と東京文理科大学において教授をつとめ，かつ長く文検の出題委員であったことなどから，わが国の戦前における地理教育界に大きな影響力をもった人物であった。戦後においても，田中は立正大学で教授をつとめ，多くの地理教科書・地図帳の編集や著作に関わり，多くの人材を育成した。戦前の中学校地理教育において影響力をもった山崎直方，小川琢治，石橋五郎という教科としての地理科に関わった人たちの中では，最も長く存命し，戦前から戦後にかけて多くの地理科教科書，社会科地理教科書，地図帳，地理附図の著作に携わり影響力を持ち続けた。

立正地理学会はその機関誌「地域研究」で田中啓爾追悼号をくみ，多くの関係者がその業績と人柄について記している。その主なものを簡潔に述べれば，山口[1]は論文「地理学発達史上における田中先生」において，田中の学問的系譜について述べ，そこから形成される田中独自の学風とそれに対する各方面からの批判を取り上げている。岸本は，論文「地誌学と田中先生」で，田中地理学の特質を実証主義的かつ帰納的な研究とし，田中の研究の特徴として新しい地理的用語の造成をあげているが，その使い方には問題点があったと指摘している。また田中が数量化の重要性を指摘しながらも数量化され得ない現象をどうするかを課題としていた事実をも指摘している。生野[2]は「巡検と田中先生」や三浦[3]の「八幡平の巡検」では田中の巡検の様子が具体的に述べられている。青野[4]は「大塚学園時代の田中啓爾先生」で大塚地理学会創立の経緯について述べている。小川は「田中啓爾先生と地図」で戦後の高等学校地図帳について言及し，「拡大図は主要地域をあきらかに表わすことを望まれ，産業関係の図は動きを表わすことを強調された。〔中略〕地理的配慮から人文現象と自然環境との関連を図解することが工夫された」[5]とあり，田中の地理教育に関して指摘している。斎藤[6]は，田中の地理区教授論形成過程をとりあげ，山田は，成田市の変容を田中の論文と比較し検討している。矢嶋[7]は地理教育者としての田中の経歴を概観した後，その地理教育観を「地理学の本質は地域性の究明にあることを学問的基盤とし，これに立脚した地理教育観」[8]にあったとした。平板的な記述から地誌を主体とした地理学と密接に関連しつつ，生徒児童の発達段階を考慮して，地域の特質と共通性の把握に重点を置き，考える地理学習を推進したとする。各地方の特色ある事象をとり上げて標式的なことに中心をおいて地域性の把握ができるようにした。正確な地図を重視したため陸地測量部の地形図を利用し，空中写真も随所にとりいれた。歴史的沿革図もいれ地理的事象の歴史的背景を示した。

立正地理学会以外のものには，佐藤[9]が田中を文検出題者としての立場からとらえ，山崎直方らとともに中学校教員志望者に対して強い影響を与えていったことを叙述している。岡田[10]は，田中の経歴と「地理区」さらには地理区論争についてまとめている。田村[11]が田中の地誌学と欧米地誌学との関連に言及し，田中の研究形成過程を 4 期に分けた上で，田中の地誌学は特にアメリカ地理学の影響を強くうけ，徹底した地理的関係の追及と「地位層」の考え方とが結合したものであると結論づけている。市川[12]は，小田内通敏と田中の講義録教科書を比較検討し，小田内には郷土への関心がみられ都市周辺を同心円状の圏的発想で捉えることを説いているのに対して，田中は各地方内部の記述単位を府県ではなく「小地理区」とし，ドットマップの多用と人文地理学に地形的輪廻の発想を適用していることを述べ，両者の共通点として読図の重視があるとの指摘がある。

こうした一連の田中研究をみると，田中がその地理教育思想を具現化したと思われる地理科教科書についての検討や，田中の地理教育観そのものを取り上げた研究は市川の研究を除いてはほとんどないのが実情であり，教科書を客観的研究資料として用いているものはない。そこで本稿では，田中の地理教育思想が具現化されている地理科教科書の分析検討を通して，田中の地理教育観を叙述し，その内容とその形成要因を検討したい。ただ，田中の活動期間は戦前戦後の長期にわたるため，本稿においては第二次世界大戦終了の 1945 年までに限定して述べることとする。

第 2 項　田中啓爾の経歴

田中啓爾（1885～1975）は，東京府牛込区払方町に生まれた後，福岡県上毛郡三毛門で育った。1907 年福岡県師範学校(現福岡教育大学)を卒業し，1912 年東京高等師範学校(後の東京文理科大学)本科地理歴史部を卒業，長崎県師範学校(現長崎大学教育学部)教諭となる。1915 年東京高等師範学校付属中学校(後の東京教育大学付属中学・高校)講師をへて，1916 年東京高等師範学校助教諭となる。

1920 年東京高等師範学校教諭となった後，同年文部省在外研究員として英・米・独・仏に 2 年間留学(文部省)した。1923 年帰国し，東京高等師範学校教授，中等教員(地理科)検定試験委員(1945 年 8 月 14 日まで)となり，1925 年には地理学評論に論文「横浜の地理学的考察」，論文「甲府盆地」を発表した。1927 年より立正大学教授を兼任し，地理学評論に論文「日本の地理区」が発表され，地域区分に手をつけはじめた。同年著書『多摩丘陵付近の地誌』(古今書院)が最初の単行本として発表され，三宅米吉に地理哲学のあらわれであるとの評価を得た。

1929 年東京文理科大学(後の東京教育大学)が設立され，その助教授[13]と東京高等師範学校教授を兼任した(副手は桝田一ニ)[14]。しかし，教授であった山崎が開学まもなく逝去したこ

とにより，事実上の教室主任は田中があたった。講義には「その地域に関する精密な地図や数多くの図表・グラフ類を用いて実証的に説述されたことはいかに学生たちに地理学の魅力を感ぜしめた」[15]といわれる。また，同年著書『我等の国土』(古今書院)を出版し，地域性の捉え方を人々に訴えた内容であった。

1930 年には論文「中央日本に於ける海岸平野の人文地誌学的研究概報―山麓論」(山崎直方博士記念論文集)，同年論文「中央日本に於ける海岸平野の人文地誌学的研究概報―高地論」(地理学評論)，1933 年には中央日本の総合研究を志し，論文「中央日本に於ける海岸平野の人文地誌学的研究概報―平野論」(大塚地理学会論文集第一輯)の三部作を発表し 3 大地域分化を論じた。1931 年には論文「朝鮮の人文地誌学的研究」(地理教育)を発表して南北性を軸とすることを主張し，1933 年には論文「支那に於ける政治・文化の中心地の推移に就いて」(地学雑誌)では地域の中心地を軸とすることを論じた。

1937 年東京文理科大学教授兼東京高等師範学校教授，1939 年学術研究会議会員(1945 年 8 月 15 日まで) となる。論文「支那の地域区分」(地学雑誌)を発表し，日本の地域区分にならった支那の地域区分も発表し，1940 年には日本学術振興会委員になった。

戦後についてを簡潔に述べると，1946 年論文「地理学的研究の態度」(国民地理)を発表し南北性・内陸性・沿海性・島嶼性・地人関係・分析と総合，地図化，実地調査，地理区の大小などを論じた。また 1947 年には論文「総合科学としての地理学」(社会地理)を発表し文理両学科の中間性について論じた。以上二つの論文が骨子となって 1949 年に著書『地理学の本質と原理』(古今書院)が出版され，同年東京文理科大学教授を退官した。

退官後も旺盛な研究活動は続き，1952 年には日本地理学会会長に推され，1955 年に論文「地誌論」(朝倉書店，地理学本質論)，1962 年に論文「消象と未象」(立正地理学会研究報告)，1952 年に論文「東京を中心とした地位層」(内田先生還暦記念論文集)，1957 年に論文「東京の地位層」(人類科学)によって消象・残象・顕象・初象・未象の発達段階と地位層という時間的段階について論じた。1958 年には著書『地理的総合研究』(古今書院)を発表し川崎および江東両地域を実証としてとりあげた。野外調査[16]などを通して実証的研究を重んじ，多くの後進を養成した。1975 年没。

第 8-1 表　田中啓爾の略歴と主な業績一覧

西暦	年齢	事項
1912	26	東京高等師範学校(後の東京教育大学)本科地理歴史部卒業，長崎県師範学校(現長崎大学教育学部)教諭
1913		
1914	28	馬杉延子と結婚

1915	29	東京高等師範学校付属中学校(後の東京教育大学付属中学・高校)講師
1916	30	東京高等師範学校助教諭
1920	34	東京高等師範学校教諭／文部省在外研究員として英・米・独・仏に 2 年間留学(文部省)
1921		
1922	36	万国地質学会議に参加(ブリュッセル)
1923	37	帰朝／東京高等師範学校教授／中等教員(地理科)検定試験委員(1945 年 8 月 14 日まで)「独立科学としての地理学」
1924	38	対支文化事業の一環として地理学研究のために 2 ヶ月間，支那各地を視察旅行
1925	39	「横浜の地理学的考察」(地理評 1-3),「甲府盆地」(地理評 2-12，3-1)
1926	40	第 3 回汎太平洋学術会議(東京)に委員として参加
1927	41	立正大学教授を兼任（地理歴史専門部の地理科主任）(1948 年 3 月 31 日まで),『多摩丘陵付近の地誌』(古今書院)
1928		『日本地理』(古今書院),『中等日本地理』(最初の田中執筆の教科書)
1929	43	東京文理科大学(後の東京教育大学)助教授兼東京高等師範学校教授,『地理教育に関する論文集』(目黒書店),『日本の旅』(アルス社)，全国中等学校地理歴史科教員協議会を会長代理として主催,『我等の国土』(古今書院)
1930	44	『世界の旅』(アルス社)，大塚地理学会会長(東京高等師範学校地理学会を改称)／　朝鮮総督府学務課から朝鮮普通学校用地理教科書の編修を委嘱され，朝鮮全土を調査旅行
1931		『日本の地理区』(古今書院)
1932		
1933	47	『地理教育に関する論文集再増補版』(目黒書店),『地理学論文集』（古今書院）
1934		
1935	49	東京市視学委員を 4 年間委嘱される(1939 年 3 月 31 日まで),『日本地図』(ケバ式)(目黒書店)発行
1936		
1937	51	『外国地図』(ケバ式)(目黒書店)発行／東京文理科大学教授兼東京高等師範学校教授
1938		
1939	53	学術研究会議会員(1945 年 8 月 15 日まで)／全国中等学校地理歴史科教員協議会副会長として運営にあたる
1940	54	日本学術振興会委員
1941	55	支那国定教科書地理科の編修を 2 年間委嘱される
1942		
1943	57	「郷土の観察」の実行方法論(地理学研究 2-8)
1944	58	「関東地方の風土と健民生活」(国土健民会会報第 1 号)
1945		
1946		
1947	61	東京文理科大学教授退官／立正大学文学部教授(地理学科主任教授)／立正地理学会会長／国立公園中央委員会委員

		(1951 年まで)／東京文理科大学名誉教授(1961 年に東京教育大学名誉教授と改称)
1948	62	『新版我等の国土』(古今書院)
1949	63	『地理学の本質と原理』(古今書院)／『九州の山河』(西日本新聞)／『東京都新誌』(日本書院)
1950	64	『田中啓爾先生記念大塚地理学会論文集』(目黒書店)／『続地理学論文集』(古今書院)／『郷土のしらべ方』(三省堂)
1951	65	国立公園審議会委員(1960 年まで)
1952	66	日本地理学会会長(1954 年まで)
1953		
1954	68	『郷土のしらべ方　重版』(三省堂)
1955	69	『新版我等の国土』(日本書院)／立正大学大学院地理学専攻修士課程主任教授／日本地理学会名誉会員／理学博士(東京教育大学・東京文理科大学)
1956		
1957	71	日本道路公団特種設計審議会委員,『塩および魚の移入路－鉄道開通前の内陸交通』(古今書院)
1958	72	『地理的総合研究―川崎市と東京江東地区』(古今書院)
1959		
1960	74	立正大学人文科学研究所所長(1965 年まで)
1961		
1962	76	『最新高等地図』(日本書院)
1963	77	立正大学大学院博士課程主任教授／立正大学応用地理調査所所長
1964	78	『新世界地図』(全国教育図書)監修
1965	79	立正大学教授を退職／立正大学講師／応用地理学研究のために 5 ヶ月間欧米 18 カ国を視察旅行／立正大学名誉教授／『第三地理学論文集』(田中啓爾先生謝恩記念会)
1966		
1967	81	『欧米所見』(私書版)
1968	82	『田中啓爾日本都道府県地図総監』(日本教図社)
1973	87	『中国大地図』(京文閣)／地理学関係蔵書を立正大学に寄贈
1974		
1975	89	急性心不全により急逝(1 月 5 日)

第 2 節　田中啓爾の地理教育に関する論文

田中の著した地理科教科書を検討する前に，本章では，田中の地理教育観そのものにつ

いて概観する。田中の地理教育に関する見解は，1933 年『地理教育に関する論文集　再増補版』(目黒書店)に集約される。同書を中心に 1920 年代，1930 年代にわけ，田中の地理教育観を概観する。

第 1 項　1920 年代

田中は，留学から帰国後すぐの 1923 年 7 月に論文「独立科学としての地理学」を発表する。この論文は，全国中学校地理歴史科教員協議会講演を採録したものであることから，中学校の教員を対象にしたものである。田中の地理学観研究上しばしば取りあげられてきた論文であるが，教員のために述べられたということを確認しておくことは，田中研究の史的位置付けを行う上で重要な要素である。その内容は，地理学的研究とは「地球の表面に於ける人類の活動及び是れに影響を与へる自然的現象を分類すると云ふことであります。さうしてグラフ(図表)を作る」[17], さらに「次にもう一つ違つた意味に於て各ステージ(Stage, 過程)を研究すると云ふことであります。〔中略〕幼年・壮年・老年等の数階級に現象を分類して行くのであります。〔中略〕地理から見る歴史といふよりも寧ろ各時代の地理だと見たいのであります」[18]と述べ，人類の活動への自然現象の影響，グラフの利用，地理的事象への歴史的考察方法の導入がみられる。さらに，地理科授業のためとして，「地図は成るべく詳しいものを使つて御研究を願ひたいと云ふことゝ，成るべく旅行を多くして頂きたいと云ふこと，併し成るべく外国よりも郷土及び種々の意味に於ての日本を最もよく研究して貰ひたい。実習の方面は成るべくグラフを多く作る実習をして頂きたい。それから地理区を成るべく早く定めて頂きたい」[19]とし，地図を使い，グラフ(図表)をつくる実習をしてほしいということが具体的な地理教授方法として田中の見解が述べられている。

1925 年には，論文「汽車旅行指導の一例　―車窓から見た東海道の地理学的考察の一部」[20]を『科学知識七月号』に発表し，汽車旅行においては単に景色を眺めるのではなく自然人文の現象が地方的色彩を濃厚に表していることを観ることで趣味と実益を伴うとし，東海道線を例にあげ地理的現象を説明している。

1925 年 6 月教育諸雑誌新聞よりの抜粋である「地理教授に関する所感の一節」[21]では，「地理的現象を記憶に残すには地図であって，教科書の文章に重きをおくべきではない」と断言し，地図を効果的に利用して授業を行うことを重視した。「地理教育上，大切にして且つ興味あるものは読図である」と述べ，地図を利用する習慣は義務教育の時代から為されるべきであるとしている。具体的には，①略図を精確に描かなければ誤った概念を教える可能性もあるので注意しなければならない②２０万分の１の地図くらいは義務教育を終えた後でも使えるようにする③他の学問に時間を取られることなく，地理的考察に充分な時間をとらなければならない④政治区画のみの地球儀ではなく，地形のわかるものをつかった

ほうがよい⑤模型も地図と同様大切である⑥地理的現象を記憶するには地図を用いるべきである⑦地理は記憶のみの学科ではなく，困難なことではあるが地人相関の理法を適切に解くことが大切である⑧授業においてもただ板書事項をうつしたり，問答のないものは駄目であるとし，地図使用について強く主張している。

1926 年「地理教育」誌上には，論文「地理学的考察の一方法　ドットマップと地理的地域」を発表し，1923 年の論文「独立科学としての地理学」を一部改作して述べ，副題からもわかる通りドットマップつまり地図の使用を重視する姿勢がうかがわれる。また，1927 年にも「地理教育」第 11 巻で論文「読図(Map　Reading)に就いて」[22]を発表し，9 枚の地形図をとりあげ，どのように読図するかを解説した。

1927 年 1 月論文「日本の地理区」[23]を「地理学評論」に発表し，結果として地理区論争の先鞭をつけるかたちとなった。それをうけ地理教育向けに 1927 年 3 月論文「日本地誌教授の単元と其の取扱の順序に就きて」を発表し，初等中等地誌教授における行政区画が地理的区画と一致していないことを述べ，地理区を論じることは「同一地帯を一括して説明する時は，其の説明の重複を避け時間の節約をなし得る点に於て効果が大である」[24]とし，教授の順序は樺太から順次南に台湾まで配列することが合理的であると述べた。1927 年 7 月論文「関東平野と中央高地」[25]が『教育研究 7 月号』に発表され「将来の地理教授は，どうしても地理区に拠らなければならない。又大体世界の風潮もこれに一致して居る」と述べた。

1929 年 1 月論文「外国地誌教授の順序に就きて」[26]を「『地理教育』誌上に発表し，重要な内容は高学年で課し，簡単なものは先に複雑なものは後に学習することが望ましいとし，「生徒の心力の発達に適応して，学科の内容の程度をたかめる」とした。田中は，生徒の心力の発達に適応して内容の程度を高める立場から，外国地誌教授の順序については，「外国地誌は多年アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニヤの順序に教授されアジアは中学第二学年に，ヨーロッパは第三学年に，アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニヤは第四学年に配当していた。それを今左の順序と学年配当とに改めたいと思ふ。第二学年　オセアニヤ・アフリカ・南アメリカ・北アメリカ」[27]にしたいと述べた。

第 2 項　1930 年代

1930 年代は地理学の中心が人文地理学へと移行した時代との指摘もあり[28]，それに伴い田中の見解も転換する。例えば，1933 年論文「再び独立科学としての地理学に就いて」で，「殊に人文現象の要因として従来自然的環境を偏重したのに対し，現今は人文的環境をも等しく重要視するに至つた」[29]とあり，「地域性を闡明することが地理学の究極の目的であ

るといふことが一層明瞭となり地形学・気候学等は地理学以外と見る傾向濃厚となり，人文地理を主体とする地理学が台頭しつゝあることもその後の大きな変化である。科学的地誌の研究が地理の重要作業として一層認められて来たことも地域性の闡明上当然のことである」と人文地理を重視する立場になった。

1932 年「地理教育上の諸問題」において，これは小学校地理教育に関する田中の見解を述べたものであるが，第１に，授業時間が不足しているので教材の軽重を吟味する必要があるため，学科の内容を相当勉強しなければならないが，総てのものを教えるのではなく，図を用いて標式的なものを教えるのである。第 2 に，地理区をあまり細かくならないように認識させる。第 3 に，郷土誌の指導は地理とかわらないもので，第 4 に自然と人文を関連付けて説明し，第 5 に日本の総説に関しては分析から綜合へと進むことは勿論だが，過去にさかのぼって地理をみることも必要であるとした。

1933 年 4 月「初等教育」誌上に掲載された「最近地理学の進歩」では，「従来の地理は地・人相関を説いたが，最近は人・地相関(人文地理的現象と所謂従来の自然地理学的現象との関係)及び人・人相関(人文地理的現象と社会的・経済的現象等との関係)が地理学的考察の主要点になつて来た。〔中略〕景観・自然景観(自然景)・人文景観(人文景)・耕作景等の表現法としては諸種の分布図がある。行政区画的密度図・ドットマップ・等密度線図・土地分類図(土地利用図)等はその分布図の一形式である。ドットマップと等密度線の如き優劣に関する議論はあるが，各一長一短があり，相助けて完全な表現法となり得る。〔中略〕然し理法の発見としては図上の操作のみで真を捉ふることが不可能で，単に予想をなし得る程度のものに過ぎない。理法は野外の現地に於て人と地物に触れて得た資料に依らなければならぬ。最近この実地踏査の方法が進歩して隠れたる要因が漸次闡明されつゝあることは地理学の将来のため慶賀すべきことである」と述べている[30]。

1933 年 5 月「郷土取扱の一例」では，神奈川県と東京の郷土誌の取り上げ方の一例を提示し，地図の種類をあげながら，具体的手法を述べている。1933 年 5 月の論文「地理科特別教室に就いて」においては，地理科は独創的・実験的・直観的でなければならず，講演的・記憶的教科であってはならず，地図を用いながら問答によって地理的考察力と地理的知識とが相俟って人間生活の能率を向上させる。その際，数種以上の掛地図を比較することによって地理的考察力がみにつくため，掛け地図は正面の壁だけではなく，後ろの壁も利用したほうがよい等事細かく述べた。

第 8-2 表　田中の地理教育論文にみられる用語一覧

	直観教材関係				記述方針					配列		地理区		その他	
論文名＼用語	ﾄﾞｯﾄﾏｯﾌﾟ	模型・実物教材	読図解説	グラフ・分布図	地人相関	人人相関	歴史的説明	帰納的説明	地理的考察・問答	教授順序	発達段階	地域性・地誌	地理区	野外調査	郷土重視
1923「独立科学としての地理学」				○	○		○						○		○
1925「汽車旅行指導の一例」			○	○	○		○								
1925「地理教授に関する所感の一節」		○		○	○			○	○			○	○		
1926「地理学的考察の一方法」	○			○	○		○					○	○		○
1927「読図(Map　Reading)に就いて」		○	○	○											
1927「日本地誌教授の単元と其の取扱の順序に就きて」										○	○		○		
1929「外国地誌教授の順序に就きて」										○	○				
1933「再び独立科学としての地理学に就いて」						○						○	○		
1932「地理教育上の諸問題」				○	○		○	○					○		○
1933「最近地理学の進歩」	○			○	○	○	○					○		○	
1933「地理科特別教室に就いて」		○		○					○				○		
合計	2	3	2	8	6	2	5	2	2	2	2	4	8	1	3

以上のような田中の地理教育観についての論文に用いられている用語を表にしたものが第 8-2 表である。田中の地理教育に関する論文には，第 1 に，1925 年「汽車旅行指導の一例」，1927 年「読図(Map　Reading)に就いて」，1927 年「日本地誌教授の単元と其の取扱の順序に就きて」，1929 年「外国地誌教授の順序に就きて」1933 年「地理科特別教室に就いて」のような教育指導上における具体的な論文が目につく。このことは，先述した山崎，石橋，小川たちにはみられない傾向であり，田中の地理教育史上における位置付けにおいて特筆すべき点である。

第 2 に，田中の地理教育についての論文における大きな柱は，グラフ・地図（分布図）をはじめとする直観教材の適切な使用，記述方針としての地人相関的記述と歴史的な説明，地理区の究明と設定といえる。ここでいう直観教材とは，図・表・写真等を含み視覚にう

ったえて生徒たちの理解を助ける教材を指す。　地理科においては多くの教科書執筆者が地理教育において「観察」を重視していることからも，直観教材は必要不可欠なものである。身近に観察できる郷土の地理学習と異なり，外国の地理となると実見は不可能となることから，多くの写真・絵や図・表・グラフ等が取り入れられる。そうした直観教材を利用して自然と人間の関係を重視する立場から，1930 年頃を境にして人文現象に力点をおくようになる[31]。

第 3 節　田中啓爾の地理科教科書

第 1 項　田中啓爾の地理科教科書の例言分析

前節において，田中の地理教育についての論文の傾向を概観したが，本節では田中の地理科教科書そのものにおける傾向を検討する。田中の戦前における教科書刊行は 1928 年から 1938 年までと比較的短く，出版社はほとんどが目黒書店であった（第 8-3 表）。

第 8-3 表　戦前に田中啓爾が著した地理教科書・地理附図一覧

初版年	教科書名	出版社	
1928	中等日本地理	目黒書店	1940 年まで，改版 3
1928	中学外国地理	目黒書店	1935 年まで，改版 6
1928	中等外国地理　上・中・下	目黒書店	▲
1931	中等新日本地理　乙表	目黒書店	1937 年までに，改版 4
1931	中学外国地理	目黒書店	1934 年までに，改版 3
1932	新中等日本地理　中学校　甲表準拠	目黒書店	1937 年までに，改版 4
1932	中学日本地理　甲表	目黒書店	▲
1932	中等新外国地理　乙表準拠	目黒書店	1933 年までに，再訂版
1935	日本地図	目黒書店	1939 年までに，改版 3 版
1936	外国地図	目黒書店	1937 年までに，再版
1937	中等新日本地理	目黒書店	1940 年までに，改訂訂正 4
1937	日本地図	目黒書店	1939 年までに，改訂 3 版
1937	中等新外国地理　改訂版	目黒書店	1943 年までに，訂正 5 版
1937	中等新地理概説	目黒書店	1943 年までに，訂正 4 版
1937	中等新地理概説	中等教科書刊	1943 年までに，訂正 4 版

こうした教科書が著された時期は, 第 3 章の第 3-1 図からもわかるように戦前地理教科書発刊数の推移からみると最後の山場に相当している。これは中学校設置の量的な拡大がはかられ，それに伴って教科書の種類が増えた時代であった。

さらに，第 4 章の第 4-2 図から，教科書執筆者としての田中の位置付けを知ることができる。1920～40 年代の地理科教科書の代表的執筆者としては，守屋荒美雄が 26 冊で群を抜いているが，石橋五郎（1876～1946），小川琢治（1870～1941），田中啓爾といったいわゆる日本の地理学を築き上げた人たちも上位にあることがわかる。

以下，田中が著した教科書をとりあげるが，その際とくに巻頭にある「例言」を重視した。例言には，通常教科書刊行にあたって著者の考えや姿勢が示されており，教科書研究にあって重視されるべきものであり，時代によって一般に例言は変遷が見られるものである。

しかしながら，田中の教科書においては，1920 年代，1930 年代を通して大きな変化がみられない。

第 8-4 表　田中の教科書の例言に見られる用語一覧

		直観教材関係				記述方針							配列	地理区	その他
初版年	教科書名　用語	ﾄﾞｯﾄﾏｯﾌﾟ	模型図・写真	読図力	統計の地図化	羅列禁止	地人相関	人文中心	歴史的説明	帰納的説明	簡明化	初等教育との接続	配列	地理区	国民精神涵養
1928	中等日本地理	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1928	中学外国地理		○	○	○	○	○		○	○				○	
1928	中等外国地理　上・中・下	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1931	中等新日本地理　乙表	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1931	中学外国地理	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1932	新中等日本地理　中学校　甲表	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1932	中学日本地理　甲表	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
1932	中等新外国地理　乙表準拠		○	○	○	○	○		○	○					
1935	（中等外国地理　上・中・下　６版）	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○	
1936	（中等日本地理　３訂）	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	
1936	（中等新日本地理　乙表　３版）	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○	
1937	中等新日本地理	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
1937	中等新外国地理　改訂版			○	○	○	○		○	○			○		○
1937	中等新地理概説	○	○	○			○	○		○			○		○
1937	中等地理概説	○	○	○			○	○		○			○		○
1940	（中等新日本地理　改訂版　訂正４）	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
1943	（中等新外国地理　改訂版　訂正５）			○	○	○	○		○	○			○		○
	計	13	15	17	15	15	14	2	15	17	2	11	15	12	6

〔各教科書を実見し，その例言で各用語が出てきている場合に，○印とした〕

直観教材関係，知識の羅列忌避，地人相関的記述，歴史的説明，個別から全体へとなされる帰納的説明，初等教育との連携をもつこと，配列に対する配慮，地理区について述べられており，それは時代を経てもそれほどの変化は示していない。1930 年代後半からは国民精神の涵養についてが目立つ程度である。

また，第 8-3 表と第 8-4 表を比較すると，地人相関，グラフの重視，歴史的考察，読図力の養成，ドットマップ，教授順序，地域性の究明，帰納的説明などは教科書，教育論文の両方でみることができる。しかし，郷土重視の考え，野外調査，発達段階については教科書においてはふれられていない。発達段階については，教授順序との関連性があり，最初は地人相関等をとらえやすいオセアニア等を先に学習し，複雑なヨーロッパやアジアは

後回しにするという見解をしめしている。

しかし，1930 年代後半になると国家との関わりから，日本に地理的に近い国，関係の深い国を先に学習する考えにかわっていく。例えば，1943 年『中等新外国地理改訂版訂正 5 版』では「東亜に関しては詳細を極め本書の半を当て，その外もわが国に関係の密接な地域及わが国策の参考に資すべき國については多くの紙数を割いた〔中略〕わが国に関する海外の重要資源及我が商品の状態については特に留意してこれを詳化に述べた」と例言にあり，社会状況に対応するような順序を採用している。

いずれにせよ，田中の地理教育論文での考えは，大筋において地理科教科書によく反映されている。

しかし，第 8-3 表，第 8-4 表からもわかるが，地理学と全く関連性がない地理教育に関するもの，具体的には初等教育からの接続問題，教科書内容の配列に対する配慮，読図力の養成，暗射のための模型図等をのせること，地図帳との連携，日本と外国の比較，覆図の使用，国民精神涵養といったものは学問観とは関連性が認められない。

以下，グラフ・地図（分布図）をはじめとする直観教材の適切な使用，記述方針としての地人相関的記述と歴史的な説明，地理区の究明と設定，配列についての見解に絞って検討する。

第 2 項　直観教材の重視

本章の第 2 節で地理教育観について述べたが, 田中の地理科教科書で強く主張されたことは，直観教材の適切な使用，とりわけ，地図の効果的な利用であった。市川も小田内通敏の講義録と比較して田中の教科書に図や写真が多いことを指摘している[32]。

田中が著した最初の教科書である 1928 年『中等日本地理』には詳細な緒言がつけられており，田中の地理教育観がわかる。またすでに，この時までには先述した田中の地理教育に関する論文の多くが発表されていることから，田中の地理教育観が初めて具現化された教科書と考えられる。そこには，

> カットの選択に際しては陸地測量部の各種の地図を挿入して，これ等によつて地理的読図力を養成し，将来の応用を期待した。／　地形図・気候図・交通運輸図等を多く掲げたのは学習者に地理的に考察させて理法を発見させるためで，ドットマップの生産分布図を二種類併用したのはその生産地域・生産額及府県別の産額を知るに便ならしめるためである。／　模型図及飛行機から見た写真等を多く採択して，地図と相俟つて地理的考察力の増進をはかり，又模型図及各種の地図に地名を省いたのは学習者をしてこれによつて暗射し練習させるためである。　／　歴史的沿革図を挿入したのは新舊を対照し，その変化により理法を会得させるためである。／　統計は

出来るだけ地図化して地理的表現につとめた。

とあり，地図利用に関して事細かく述べられている。この後の田中の教科書でもこの地図重視の考えに変化はみられない[33]。この時期，田中が地図中心の地理学習を進めることができた背景には，この時期，5 万分の 1 地形図が 1918 年～1924 年までに全国をほぼカバーしたため，田中も地形図を利用した地理教育を展開しやすくなったと考えられる。主な地理教科書の直観教材の数を数えたものが第 8-3 表である。

第 8-5 表　地理科教科書にみる直観教材の比較

著者名	教科書名	全頁数	直観教材総数	図・表	絵・写真
田中啓爾	1928 年初版『中等日本地理』	254	428〔1.6〕	333（78%）	95（22%）
	（1940 年改訂三版『中等日本地理』）	272	638〔2.3〕	522（82%）	116（18%）
	1928 年『中等外国地理』	529	1155〔2.1〕	578（50%）	577（50%）
	1931 年『中学外国地理』	363	804〔2.2〕	463（58%）	341（42%）
	1932 年『新中等日本地理』	184	416〔2.2〕	341（82%）	75（18%）
	1932 年『中学日本地理　甲表』	220	433〔2.0〕	353（82%）	80（18%）
	1932 年『中等新外国地理　乙表』	233	515〔2.2〕	357（69%）	158（31%）
地理教授同志会	1932 年『新制世界地理　甲表用』	188	327〔1.7〕	76（23%）	251（77%）
石橋五郎	1933 年『新体中等地理外国之部甲表準拠　上下』(1931 初版)	298	665〔2.2〕	303（46%）	362（54%）
	1935 年『三訂新体中等地理　外国之部　甲表準拠上下』(1931 初版)	287	716〔2.5〕	306（43%）	410（57%）
小川琢治	1929 年『新地理学日本之部』	176	252〔1.4〕	83（33%）	169（68%）
	1937 年『中等新地理　外国之部』	218	385〔1.8〕	157（41%）	228（59%）
	1937 年『中等新地理日本之部』	208	513〔2.5〕	222（43%）	291（57%）

〔筆者実見により作成した。地図・分布図は図・表に含む。〔〕内は 1 頁あたりの直観教材の数〕

第 8-5 表から，直観教材数は他の教科書と田中の教科書の数はそれほど変化がない。しかし，図・表の割合を比較してみると，他の教科書よりも田中のものが多いことがわかる。田中は，データを地図化したものを作ったうえで，そこから地理的概念，地理的理法を学ばせようとしていたと考えられる。具体的には，田中はドットマップを多用し，そうした豊富な図を読図することで，地理的感覚を養おうとしている。田中は単に写真・絵を掲載するのみではなく，図表を用いることを重視し，そこに教育的価値を見いだした。地図や絵をただ掲載する方法から，教科書作成者の教育意図を伴った教材を使うことへの志向があったと考えられる。知識を上から授け暗記させる教授形態から，その情報を読み解き，

考えさせる教材としての直観教材をのせた教科書への移行が田中にはみられる。

具体的には，1928 年『中等外国地理』と 1928 年『中等日本地理』において，ドットマップが相当数掲載され，そこから地理的な理法を理解させる意図がその例言からもわかる。1931 年『中学外国地理』では，「１カット選択に際して，地形図・気候図・生産分布図・交通運輸図・人種分布図等の各種の地図を挿入したのは学習者に地理的に考察させて理法を発見させ，これによつて地理的読図力を養成し，将来の応用を期待したためである」，「１模型及飛行機から見た写真等を多く採択して，地図と相俟つて地理的考察力の増進をはかり，又模型図及各種の地図に地名を省いたのは学習者をしてこれによつて暗射し練習させるためである」，「１歴史的の沿革図及絵画を挿入したのは新旧を対照し，その変化により理法を会得させるためである。」，「１統計はできるだけ地図化して地理的表現につとめた」とあり，地図を読んで地理的理法を理解させようとするのが，田中の地理教育観である。先述した 1925 年「地理教授に関する所感の一節」[34]でも「地理的現象を記憶に残すには地図であって，教科書の文章に重きをおくべきではない」とまで述べている。

こうした田中の地図重視の立場は，田中は教科書にとどまらず地図帳にも力を入れていることからもわかる。田中の地図帳は，戦前期において守屋荒美雄とともに特に教育的配慮をもったものであったことは別稿[35]にて述べたが，田中の地図帳は教科書とともに特筆すべき内容をもっていた。例えば，田中啓爾の『外国地図』において，学習上便利を考え「序に自然地理と人文地理の両現象を明らかにするに足る地図」をのせ，各大陸及び地形図と土地分類図，夏冬全年気候図，植物分布，言語分布，宗教分布，人口分布，人口密度，産業図，交通図，政治区画図をのせて学習上便利にした。各地方考察の場合にも観察に資し，部分より全体，分析より綜合への考察過程をとれるようにし，列強の勢力の消長ものせた」と地図重視の立場をとっている。

その他にも，田中の地図帳の特長でもある世界に於ける各種分布図があり，米・小麦・銅・石炭・コーヒー・オート麦・ライ麦・とうもろこし・羊・牛・馬・豚・馬鈴薯・綿生糸・砂糖などのドットマップがかなりの数が載せられているため，分布の状況をつかむのに適している。その思想的背景には，「地理科の使命として，「①自然との相関の関係から，地方の地理的現象を観察させ，すべて地図を用いて分布の様式を考察させることにある。②分布の見方を練習し，それを指導するのが教師の責任である③行政区域にこだわらず，自然にもとづく考察をすること④地名の暗記は目的ではなく，理解の程度を聞くたびに自然と覚える物である⑤自己の郷土を理解すれば愛するようになり，日本を愛するようになり，国際的平和を愛するようになる」[36]とした。田中は教科書のみならず，地図帳においてもドットマップ等をふんだんに用いていた。

第 3 項　地人相関的記述

1928 年『中等日本地理』の例言において，「巻末の総説の篇に於ては各地方別に習得した知識の相互の関係を系統づける点に重きを置き，すべて帰納的に説術し，〔中略〕記述は単に羅列的にせず，紙数の許す限り説明的にし，問題は能ふ限り地理的意義の豊富なものを選んだ」と述べている。同様に，1928 年『中等外国地理　上中下』や 1931 年『中学外国地理』目黒書店においても，「各地方を説くに当つては能ふ限り最初に地形・気候等の自然を説き，その際それぞれ地形区・気候区的に説述し，且つその場合人文との関係については言及せず，処誌を述べる時に到つて，人文とそれ等との関係を学習者に発見せしめ，最後に人文にて帰納的に統括」し，「各大陸の総説に於ては各地方別に習得した知識の相互の関係を系統づける点に重きを置き，すべて帰納的に説述した。〔中略〕記述は単に羅列的にせず，紙数の許す限り説明的にし，問題は能ふ限り地理的意義の豊富なものを選んだ」と述べた。

ここで言う「地理的理法」とは，「分布の様式を考察させ，地形，気候，位置，自然との因果関係をとく[37]」ことであるとし，それらを地図上から発見させることを重視した。すなわち，地理的理法[38]とは，同一地域の各種の地図を比較して，其の一の地図における一現象の群(Groupes)と他の地図における群とが同一地点に存在するか否かを吟味し，相互の間に因果的関係があるか否かを決定する方法である。この立場は，自然環境の影響(地人相関)を考察し，地理的理法を追求するといったこの時期の地理学研究の見方と合致している。「地理的単元の認知」は，後に田中の地理学の使命ともいえる「地域性の追求」に通じるものがあり，「地理は，地図を見せてそれで一つのまとまった地方の地理的現象を観察させる[39]」とし，その結果として「地方色の把捉」すなわち地域性の追究へといたるとした。以上二点のことを追究するための方法として共通にあげられているのが，地図，具体的にはドットマップの利用であった。

第 4 項　地理区の究明と設定

田中は，地方誌の取扱いについて地理区を単元とした。「欧米に於ける科学的地誌の研究の対象はすべて地理区であり，中等教育に於ても亦地理区によつて教材を排列してゐる。地理区は地球の表面を分つ地理的単元であつて，地理的に類似した地域を一個の地理的の物体の存在と認めるのである。生徒に地理区の個性を知らしめることは地理学習上極めて肝要なことである」としている。行政区画については，「行政区画は地理的に見ると不自然的に区画されてゐる場合が多い。従つて生徒の地理的知識として永久に脳裡に残させるにはこの比較的不変な地理区によることが最も教育の目的に適つてゐる」と考えていた[40]。

実際，1928 年『中等外国地理』と 1931 年『中学外国地理』では，「各大陸を区分するに

は先づ大地理区により，各国は国としての独立性を認め，一区として取扱つてゐるが，その国内は自然的な地理区に分ち，隣国の地理区との連絡に留意してゐる。数箇国が合して完全な地理区を形成してゐるものは一区として之を説述し，各国はその内に於ける一政治区として取扱つてゐる」とある。田中の地理区論争については，岡田がくわしく述べている[41]。

また，戦後においては田中の学問的集大成と考えられる著書『地理学の本質と原理』では地理区を設定し，地人相関をドットマップを用い，輪廻思想を人文現象に取り入れる。そして，地域性を区別しその説明をする。これが地理学であるとした。これらの考えは 1920 年代の田中が著した教科書には見られるものである。こうしたことから，田中の学問的エッセンスは教科書に戦前からすでに反映されていると考えられる。

第 5 項　配列についての見解

（1）日本地誌の配列

1928 年『中等日本地理』の例言において，初等教育との連絡を行い，重複を避け，「本書は初等教育の地理書との連絡については，徒に重複することを避け，同一教材を説く場合にもその内容を深めて有意義な取扱をすることにした」とある。

さらに，各地方誌配列の順序については論文 1927 年「日本地誌教授の単元と其の取扱の順序の就きて」に述べた如く，「樺太から順次南下し，台湾に至る案が最も合理的」であるが，今暫く過渡時期の案として従来の案とこの案とを折衷し，関東地方と中部地方とを合して中央の日本とし，これを中心にして南北に漸移することにしたと田中は述べた。このように，田中は教授要目とは異なった見解をもっていたが，最終的には教授要目を尊重したとみられる。実際，1928 年『中等日本地理』での配列は，関東，中部，近畿，中国及四国，九州，奥羽，北海道，樺太，台湾，朝鮮，総説となっているからである。1932 年『新中等日本地理　中学校甲表』や 1932 年『中学日本地理　甲表』において，樺太，北海道，奥羽，関東，中部，近畿，中国及四国，九州，台湾，朝鮮，総説という順番になっている。

（2）外国地誌の配列

1931 年『中学外国地理』と 1932 年『中等新外国地理　乙表準拠』では，「オセアニア→両極地方→アフリカ→南アメリカ→北アメリカ→アジヤ〔以上上巻〕→ヨーロッパ〔以上下巻〕となっており，その緒言では「各大陸の説述の順序は新要目に準拠せるが，この順序は余の多年の希望と一致する所であつて，本書は其の改正の趣旨の発揮に努めてある」とある。これは 1931 年に教授要目が変更され，そのような順番にするようにとのことをうけて，田中もようやく変更することができたのである。日本地理の場合と同じように，法

令の改正をうけてから順序を変えたことがわかる。

1937 年『中等新外国地理　改訂版』(1940 年訂正４版を参照した)では，時代の要請から近くの国を先に行うようになったことが理解される。１各大陸の説述の順序はわが国の延長である東亜より始め，その外縁をなすアジヤ及オセアニヤを述べ，次にヨーロッパとその外縁をなすアフリカに及び，最後に北米とその外縁をなす南米に終ることにした。かく世界を地理的三大ブロックに分ちて述べ，大西洋・太平洋に附加して結んだ。１東亜に関しては詳細を極め本書の半を当て，その外もわが国に関係の密接な地域及わが国策の参考に費やすべき国については特に留意してこれを詳かに述べた。

第 4 節　田中啓爾の地理教育観の形成要因

前節において田中の地理科教科書の特徴についてみた。田中の地理教育論文の主旨と教科書内容はほぼ一致し，田中の地理教育観が照射されたといえる。では，その田中の地理教育観の背後にある学問観との関係はどのようなものであろうか。

第 1 項　田中啓爾の地理学史上の位置付けに関する先行研究

田中の地理学観の形成史は，第１に，先述した山口による「地理学発達史上の田中先生」において知ることができる。その内容は，まず田中の学問的系譜の始まりとして，「Ratzel の後継者を自ら任じてたクラーク大学の Sample,E.C.から人類活動に及ぼす自然環境の支配的な役割について影響をうけた。その後は Davis,M.W.(1850-1934)に影響をうけ，Davis の助言を受けブラーシュの研究に打ち込み，人文地理即地誌への信念を強めていくと共に，研究法にデーヴィスの輪廻思想を借用していくとある。田中本人の「独立科学としての地理学」において，地理は地表面に一つのまとまりをもつ“地理区”を対象とする独立科学であることとし，その方法としては，地理区内で自然環境と人間生活との結合である“分布”を知り，その分析によって両者の因果・相関関係を知ることである」とある。すなわち，ブラーシュの目的観がかざされつつ，ラッツェルの“分布論”が顔を出しているのであると山口は分析している。「この体系の根底には先生の自然尊重の精神があり，なかんずくその基礎として地形をもっとも重視」され，具体的には『多摩丘陵附近の地誌』や『横浜の地理学的考察』に反映されているとしている。

第 2 に，田中は地人相関を追究するために，専門的並列的に研究することをやめ人間生活と関係を持つ項目だけに限定してまとめるようになるった。その手法で研究されたものが『甲府盆地』や『華南の地誌』であった。

第 3 に，分析中心から総合中心への転換をみている。その結果処誌が先行し，総論は帰納的な結論と考える。『塩および魚の移入路』『大陸の諸研究』はこれに当たる。その他に

地位層の導入によって多面的研究を立体的に統一していったと山口はとらえている。

同様に田中の研究歴をとりあげたものとしては，稲永の「数量化の田中先生」がある。そこでは，田中に対する批判，ヘットナー学派からのものをとりあげている。田中は地域性に対して共通性と特殊性の両面を認め，法則追求に対しても批判的ではない。しかし，ヘットナー学派はエリアの中における諸事象の場所的結合を，その現実の複雑さにおいて示すこと，すなわち地域および地域のパターンを叙述することがその中心であり，法則の追求に対しては否定的であった。また，田中は分布の追求こそが地理学であるとしたが，ヘットナー学派は分布とは地域性闡明の手段であるとした。分布を中心においた法則追求に対して田中への批判があったことを取りあげている。

岸本は，「地誌学と田中先生」で，田中地理学の特質を「実証主義的な研究であり，帰納的な研究に終始」しているとし，もうひとつの特色を「新しい地理的用語の造成」としているが，岸本は「ただ，新しい一つ一つの用語については，必ずしも厳密な定義を下されつつ使っておられなかった面も見られる」[42](p 8)と述べている。また，田中は，地理学が教育地理から離れ地域診断にこそ果たすべき役割があるであろうとしていた。また，数量化の重要性を指摘しながらも数量化され得ない現象をどうするかも課題としてもっていたことを指摘している。

また，田中の地理学観の形成史については，先述した田村の研究に詳しい。田中が地理学研究活動において，最も重視したのは地誌学であり，田村[43]は田中啓爾の地誌学形成の過程を歴史的に分析し，田中の学問的な時期区分を，第 1 期・留学時代（1920～23 年），第 2 期･アメリカ地理学の影響を受けた時代(1923～30 年前後), 第 3 期･地域性追究の時代(1930～50 年前後)，第 4 期・地位層追究の時代(1950～75 年)の 4 期にわけた。

しかし，地位層の追求がみられるのは 1950 年ころからであるが，戦前の田中の教科書には歴史的推移を意識した記述がみられる事実がある。

第 2 項　田中啓爾の地理学論文について

1949 年の『地理学の本質と原理』[44]において田中の地理学観が集約されることになるが，こうした考えはそれ以前にはどのように見られてくるのであろうか。田中は戦後の 1949 年『地理学の本質と原理』において，彼の学問的な立場は，地域性の究明こそ地理学の目的とし，広範囲にわたる徹底的な要因追求を地誌学の立場から行った。その具体的内容として，第 1 に，地理区を決定しそこにおける人間への自然環境の影響(地人相関)を考察し，地理的理法を追求追究すること，第 2 に，ドットマップの利用を重視すること，第 3 に人文地理学への「地理学的輪廻[45]」を適用することなどがあげられる。

第 1 の立場を，田中は「そこで所変われば，地方色があり，地理が生れるというのであ

る。その一定の地域の地理的性格を地域性と言い，二つ以上の地域性の闡明，即ち理論的説明を地理学というのである[46]」と地理学の本質をのべている。第 2 の立場は，研究の具体的方途として，ドットマップの利用を重視しており，先述した田村もこのことを指摘している。ドットマップによる分布図を多く利用し，それらの因果関係を探求するには，行政区画による地図よりも，ドットマップが適していることを述べている。第 3 の立場は，田中が研究活動末期に到達した「地理学的輪廻」(田中は「地位層」という)については，戦後になり田中がアメリカ地理学の影響から産み出したものである。

その他にも，1923 年「集落地理上から見た東京大阪との比較」[47]において，第 1 図「東京の人口分布」第 4 図「東京の工場分布」第 8 図「東京及其の郊外の五箇年間に於ける人口増減」といったドットマップが載せられている。その後，1924 年「和泉山脈北部斜面及びその山麓地方の地理学的考察」[48]においてもドットマップが掲載されており，この 1923 年頃から田中はドットマップを用いていることがわかる。

1925 年論文「横浜の地理学的考察」[49]の冒頭には「余は横浜の地理的単元の決定により始め，東京との関係に及び，進んで横浜の現状(震災前)を説き，次に之れ等の地形に負ふ所を述べ，それ等が自然と人工との力によりて現在に至れるまでの発達の径路を地理的に明かにしたいと思ふ」とある。また，1925 年論文「甲府盆地」[50]の緒言でも「行政上の単元である山梨県は，自然的な二地理的単元から成つて居る。東半は郡内山地で，西半は甲府盆地である。〔中略〕其の地方的色彩を明かにすると共に，それ等がこの盆地の地形・気候・位置等の環境の支配をどれだけ受けて居るかを観察して見たい」とのべ，地理的単元を決定した後，そこにみられる人文現象にみられる自然からの影響をとらえようとしている。特に後者の論文では，第 11 図「甲府盆地田の分布図」，第 12 図「甲府盆地畑の分布図」第 15 図「甲府盆地桑栽培地帯図」第 28 図「ドットマップ式人口分布図」といったドットマップもみられる。これに対して田村はベーカー(Baker，0)の 1917 年に発表された論文の影響があると述べている[51]。

1927 年著書『多摩御陵附近の地誌』[52]では，三宅米吉の序文がつけられており「地理学は地上に於ける人為的諸現象を明かにし其の現象の起因，相互の関係等を研究するものなり。人為的現象は固より地形地勢地質等の自然的現象に基づくものなるが，自然的現象は長年月の間変化すること少けれども，人為的現象は短日月に著しき変化を示すものなり。故に人為的現象には必ず其の経過し来れる変遷あり，其の変遷を考察して始めて現状を明かにすることを得べきなり。本書は是等の研究を説示せるものにて地理学の新しき方面の開拓に資する所多かるべし。地理学は其の自然地理に於て已に大なる進歩をなしたれども，人文地理に於ては未記載的の範囲を脱せず，更に諸方面の研究進みて理論的地理学又は地理哲学とも云ふべきものの成るべきを期待す」とあり，田中の研究が「人為的現象には必ず

其の経過し来れる変遷あり，其の変遷を考察して始めて現状を明かに」と述べていることからもわかるとおり，後の田中の考えである「地位層」への片鱗がみられる。田村も，地位層の考えは 1925「横浜の地理学的考察」と同様に人文地理学への輪廻の適用があるとみている[53]。また田村は，本格的に発達段階による差を層位学的にとらえ「地位層」と概念づけたのは 1952 年の「都市と村と半島と島との地位層」であるとしている[54]。また，自然と人文現象の関連をみると，1927 年の論文「日本の地理区」[55]では，地形区を決定要素としているが，気候区も次に重視した。自然の地形によって地域区分がなされており行政区画は考慮されていなかった。この論文がのちの地理区論争の発端となった。

1929 年著書『我等の国土』[56]が出版される。この序文において「我等の愛すべき国土を地理的に紹介したいと思ふてこの書を書いた。又新しい地理的考察法も理解して頂きたくてこの地理読本を書く気になつた。〔中略〕児童・生徒・学生・及び一般人士の愛読を希望するためなるべく専門的の熟語を避けてあるが，地理的研究の内容は相当に努力して収めてある積りである。地理専門の人々には余の地理的研究の概報位に見て頂ければ結構である。〔以下略〕」とり上げる配列も，「樺太，北海道，奥羽地方，関東地方，中部地方，近畿地方，中国及四国地方，九州地方，台湾，朝鮮」となっており，中国及び四国地方を一緒に取り上げる方法は，彼の地理区に対する考えがはっきりと反映されている。ただ，写真・図表等は少なくなっている(54 枚)。

第 3 項 知識降下型から教育的地理科へ

田中の地理科教科書の質的変遷は，学問の変遷と重なる部分が多く見られた。学問の影響を色濃く受けながらも，著者の意図を明確に伝えるさまざまな地図による主題図を掲載し，教材というものにふさわしい教科書への転換がみられた。田中の場合，その中心には文字情報ではなく「地図」があった。換言するならば，「単なる地名がのっている地図帳」「文字情報中心の教科書」から地図を中心に据えた「地理学的地理教材」[57]へ，そして「教育的地理教材」への展開がみられたといえる。

特に，地図帳の変遷の背景には，明治から戦前にかけて中学校への進学希望者の量的に拡大するなかで，地理科の質的充実を伴っていたことがあげられる。すなわち，学問知識降下型の教科書・地図帳は，高等教育からの地理学知識が中学校へ降ろされていくなかで，少しずつ教育的方法がとりいれられ，教材化を志向する質的充実の展開過程であった。具体的には田中の教科書・地図帳には教育的効果の重視が顕著に見受けられ，地理科教材史のひとつの頂点を見極めることができる。

地理的知識を広めるために，田中はそれまでのアカデミズム地理学者にはない著作を出版する。例えば，1930 年日本児童文庫『世界の旅』アルス，252 頁　非売品である。この

内容は，

「大正九年の十二月に私は横浜を出帆した。旅券の裏書だけは忘れぬように，出発前に横浜の米国領事館でしてもらつて肌身離さず持つてゐた」とあり，北米合衆国，カナダ，西インド諸島，南米，イギリス，フランス，ベルギーとオランダ，ドイツ，スイス，中央ヨーロッパの東南部，北ヨーロッパ，東部ヨーロッパ，南ヨーロッパアフリカ大陸，西部アジヤ，インドと巡り歩いた後に，

> ／皆さんもさぞ両親や兄弟に会ひたいでせう。日本の御飯や味噌のお汁や沢庵漬けが食べたいでせう。寿司も蕎麦もお汁粉も待たれるでせう。洋食に飽いて始めて和食のまた捨て難い味がわかる。旅のつもる話は何から話してよいかわからないに違いないから，まあ元気な顔をまづ家族の前に見せるのが何よりの土産であらう。これで旅行団も解散としよう。(手書き風の絵が７７枚)」

などのように親しみやすいものを著している。また『我等の国土』も同様の性格をもっている。この序文において「我等の愛すべき国土を地理的に紹介したいと思ふてこの書を書いた。又新しい地理的考察法も理解して頂きたくてこの地理読本を書く気になつた。〔中略〕児童・生徒・学生・及び一般人士の愛読を希望するためなるべく専門的の熟語を避けてあるが，地理的研究の内容は相当に努力して収めてある積りである。地理専門の人々には余の地理的研究の概報位に見て頂ければ結構である。〔以下略〕」とある。

田中は，学問的成果を教育的に，時には一般読者等にわかりやすく伝えようとした。また，田中は地理学を学んだ者が学校地理教育の現場にのみ行くことに対して時に危惧を感じていた。地理学を学んだ者は，社会に出て認知されることが地理学徒にかけているとも述べていた。このことから，田中はより社会において地理学の成果が広く普及することも望んでいた。そのため，『我等の国土』を著したと考えられる。田中は，学問成果を地理教育のみならず，広く社会に普及しようとした点で，地理学史上特筆すべき人物であると考えられる。

第 5 節　地理附図から見た田中の地理教育観

これまでのことから，田中が直観教材である地図を重視していたことがわかる。旧制中学校地理科の地理附図については筆者が別稿[58]にて検討を加えた。地理附図の内容を概観すると，「初期」（1880 年代後半～1900 年代前半）は，簡単な州別の地図が主である時期，「中期」（1900 年代後半～1920 年代）は，地図の地名が詳細になりながら，州別の地図以外にさまざまな地図（資料図）がのせられ始める時期であり，後期（1930 年代～1945 年）は，教育的見地にもとづく地理附図があらわれる時期であった。

具体的には，田中の地理教育観は『地理教育に関する論文集（再増補版）』[59]において詳細

に述べられている。まず地理の研究について，「地球の表面に於ける人類の活動及是に影響を与へ自然的現象を分類すると云ふことであります」とあり，地人相関の思想がみられる。

外国地誌教授の順序についても，

> 「外国地誌は多年アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニヤの順序に教授されアジアは中学第二学年に，ヨーロッパは第三学年に，アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニヤは第四学年に配当していた。それを今左の順序と学年配当とに改めたいと思ふ。第二学年　オセアニヤ・アフリカ・南アメリカ・北アメリカ」とする。

その理由は，重要なものを高学年に課して，簡単なものを先にし，複雑なものを後にすること，生徒の心力の発達に適応して，学科の内容の程度の高まることが他の教科と同じ比例に近くなることをあげた。オセアニヤから始める理由は，南洋及びその隣接地で，日本地誌に続く自然の順序であり無理なものではないこと，オセアニヤに次いでアフリカ・南アメリカと類似した位置にある南半球の三大陸を東から西へ説くことは自然であること，オーストラリアは地形気候植物人文が極めて簡単で，気候と植物，人文との相互関係が明確であるから，最初に学ぶには適切な教材であること，南半球の後に北半球に及ぶことは自然である。南半球は新しく開け簡単であるから，複雑な北半球をあとにすることは良い結果をうむこと，北半球の最初には南アメリカとつながりのある北アメリカを説くことは自明のことであり，歴史が浅いため自然と人文現象の関連がつかみやすいことから生徒の理解は容易であるとしていると述べている。アジアとヨーロッパとどちらを先にするかは他の大陸ほどに自然の順序に関係することは少ない。重要性と複雑性からいうとアジアよりヨーロッパを後に説くべきであり，ヨーロッパ列強を最後に説くことは人文地理通論に近い結論が自然に生徒の頭脳に涵養される。アジアを終えて，ヨーロッパを説けば完全に世界の人文地理的の統括が行えることになるとした。

地理科の使命として，「①自然との相関の関係から，地方の地理的現象を観察させ，すべて地図を用いて分布の様式を考察させることにある。②分布の見方を練習し，それを指導するのが教師の責任である③行政区域にこだわらず，自然にもとづく考察をすること④地名の暗記は目的ではなく，理解の程度を聞くたびに自然と覚える物である⑤自己の郷土を理解すれば愛するようになり，日本を愛するようになり，国際的平和を愛するようになる」[60]とした。田中は以上のような学問的体験から教科書や地理附図を著し，戦後も存命し，多くの地理の教科書や地理附図をだしていくことになる。

第 6 節　地理教育史における田中啓爾の位置付け

第 1 項　田中啓爾の地理学観と地理教育観

田中の地理教育観の最大の特徴は，地理区の設定と地図の有効利用，地理的理法の捉え方，内容配列，ドットマップ等において特徴がみられる。地理区の設定については，地理区論争を引き起こした。地理的理法の捉え方は，1920 年代と 1930 年ではおおきな転換がみられた。一方で配列についてみられるように，田中は彼独自の考えを持っていたが，周囲の状況にあわせるといった現実的な対応をとったこともあった。

こうした地理教育観の背後にあったのは，彼独自の学問観であり，教育制度や法令などの影響もうけた。先行するアカデミズム地理学に属する山崎，小川，石橋との関連性で捉えると，山崎は自然重視の立場をとり，教科書の内容が羅列される傾向があったが，田中は当初は自然重視の傾向もあったものの，人間と自然の相互関係，または人間から自然へと働きかけることにも配慮した。また，小川琢治が依拠する歴史地理学と，田中の「地位層」とは類似し，時間から捉えた地理であるが，田中の場合はアメリカ留学時代に教えをうけたデーヴィスによるものと考えられ，その出所は異なっているものと言えよう。

第 2 項　田中啓爾の地理教育観と出自

石橋五郎は地理教育の系統的確立をめざし，地理教育と地理学，教育の区別をするなど理念的側面が強かったが，田中の場合は目標論を大きく論じることはなく，より具体的な形で授業に対しての知見を提示したことがわかる。より身近に現場にある教師たちの視点に立っていたと考えられる。

田中は，1907 年福岡県師範学校を卒業し，1912 年東京高等師範学校本科地理歴史部を卒業，長崎県師範学校教諭となった。1915 年東京高等師範学校付属中学校(後の東京教育大学付属中学・高校)講師をへて，1916 年東京高等師範学校助教諭となった。1920 年東京高等師範学校教諭となった後， 2 年間留学後に，東京高等師範学校教授となった人物である。本研究で取り上げた他の 3 人の人物とは異なり，山崎と同じ東京高等師範学校の教授であったとしても，師範学校や中学校の教諭経験をもち,現場からの視点を失わなかったことに田中の特長があるといえる。例えば，各地の中学教員を対象として講演して回るなどの活動が多かったことも田中の特長が反映されたものといえる。

そして，このことが従来の知識降下型の地理教育とは異なった立場をとるにいたった。大学からの系譜と現場からの系譜が収斂したところに田中は位置していたのであろう。この立場を反映するものとして，1920 年代後半に発表され 1930 年代に盛んになった「地理区論争」にも象徴的に表れていると考えられる。学問上でも教育上でも論争を引き起こしたということは，田中の立場を象徴しているといえよう。

また，田中は活動期間が長期に及ぶことから，戦前，戦後と橋渡しになった存在として興味深い人物である。戦後に於ける活動については，別稿にゆだねることとし，田中の戦

前における役割とは学問観と密接に結びつき，かつ現場への配慮が行き届いているものであったことを指摘にとどめておきたい。また，本稿では女子に対する地理教育ならびに師範教育における地理教育については触れなかった。別稿をもって検討したい。

【注】

1 山口貞雄「地理学発達史上における田中先生」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，2-6 頁。

2 生野真直「巡検と田中先生」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，44-50 頁。

3 三浦鉄郎「八幡平の巡検」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，51-57 頁。

4 青野寿郎「大塚学園時代の田中啓爾先生」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，14-20 頁。

5 小川一朗「田中啓爾先生と地図」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，31 頁。

6 斎藤之誉「田中啓爾における地理区教授論の形成過程」筑波社会科研究 第 20 号 筑波大学社会科教育学会 2001．39-50 頁。

7 矢嶋仁吉「地理教育者としての田中啓爾先生」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975，36-43 頁。

8 山田道人「成田市における門前町の変容――田中啓爾の論文と比較して」地理，1987，38 頁。

9 佐藤由子『戦前の地理教師』古今書院　1988　43 頁

10 岡田俊裕『地理学史』古今書院，2002 年，41-45 頁，191-202 頁。

11 田村百代『田中啓爾と日本近代地誌学』古今書院　1984 年

12 市川義則「1920 年代後半における「日本地理」教科書の比較研究――小田内通敏講述『日本地理講義』と田中啓爾著『中等日本地理』の場合」新地理 46-3，1998，12-27 頁。

13 教授は，山崎直方であったが体調が優れず，田中が研究室において指導的立場にあった。

14 第一期学生には青野寿郎・安達茂夫・石川与吉・崎田竜二・蛭田浩一郎の 5 名がいる。

15 東京文理科大学『東京文理科大学閉学記念誌』1955，272 頁。

16 田中の実地踏査の詳細については，田中啓爾「臨地研究の半生」大塚地理学会編『田中啓爾先生記念大塚地理学会論文集』目黒書店，1950，1-41 頁。　に詳しい。

17 田中啓爾『地理学論文集』古今書院，876 頁。

18 前掲 17）　874-875 頁。

19 前掲 17）　878 頁。

20 田中啓爾『地理教育に関する論文集　再増補版』目黒書店，1933，167-181 頁。

21 前掲 20)　 119-128 頁。

22 田中啓爾「読図(Map　Reading)に就いて」『地理教育』11 巻，1927。

23 田中啓爾「日本の地理区」『地理学評論』3－1，1927。

24 前掲 20)　30 頁。

25 前掲 20）　97-118 頁。

26 前掲 20)　57 頁

27 前掲 20）　56 頁

28 三野与吉「自然地理学は滅亡せしものなりや」大塚地理学会会報，1933，12 頁。

29 前掲 17)　921 頁。

30 前掲 20)　124-126 頁

31 また，その他の傾向として，1920 年代には地理教育に関する論文は多いが教科書は少なく，1930 年代には論文の数は少ないが教科書の数が多くなった。

32 市川義則「1920 年代後半における「日本地理」教科書の比較研究――小田内通敏講述『日本地理講義』と田中啓爾著『中等日本地理』の場合」新地理 46-3，1998，16 頁。

33 1936 年『三訂中等日本地理　乙表準拠』の例言には「改訂に際しては一層平易簡明にし，学習者に理解を容易ならしめ，且つ特別外地をはじめ時勢の進歩に伴ふ内容の変更を行つて」とあり，1928 年版と同じ内容である。「挿入地図に就いては，拙著「日本地図」に詳かなるものは本書に於ては省略して重複を避けた」と付け加えられている。1937『四訂版中等日本地理』でも緒言は 1936 年版と変わらない。版を重ねても地図を重視する姿勢は変わらなかった。また，1928 年『中等外国地理』初版，改定版でも，ほぼ同様の緒言が掲げられている。

34 田中啓爾『地理教育に関する論文集　再増補版』目黒書店，1933，119-128 頁。

35 近藤裕幸「戦前の中学校地図帳を通してみた地理教育論の展開」早稲田大学大学院教育学研究科紀要（別冊）10-1，2002。

36 前掲 20）　125-128 頁

37 前掲 20）　126 頁

38 前掲 20）　66 頁

39 前掲 20）　125 頁

40 地理区と行政区画の比較については参考論文「日本地誌教授の単元と其の取扱の順序の就きて」の中にその一端を述べてある。

41 前掲 10)　191-202 頁。

42 岸本「地誌学と田中先生」地域研究 16-1･2，立正地理学会，1975。

43 前掲 11)

44 田中啓爾『地理学の本質と原理』古今書院　1949 年

45 地理学的輪廻とは,「或る地域の性格の時間的(歴史的，年代的)変化は，地域性の発達過程の一型式と見るのが妥当である。自然も人文も共に幼，壮，老及回春(若返り)，進化又は退化の

発達過程(段階)を辿るものと見て謬りはない」とする田中の立場である。

46 前掲 44）　1-2 頁

47 田中啓爾「集落地理学上から見た東京」　大阪との比較」早稲田大学集落地理学会後援 1923 年，地理学論文集(古今書院)1933 年。

48 田中啓爾「和泉山脈北部斜面及びその山麓地方の地理学的考察」『地理学論文集』古今書院，1933。

49 田中啓爾「横浜の地理学的考察」地理学評論１-3，1925。

50 田中啓爾「甲府盆地」『地理学論文集』古今書院，1933。

51 前掲 11）　39 頁。

52 田中啓爾『多摩御陵附近の地誌』古今書院，1927。

53 前掲 11）　39 頁。

54 前掲 11）　45 頁。

55 田中啓爾「日本の地理区」地理学評論 3-1，1927。

56 田中啓爾『我等の国土』古今書院，1929。

57 「地理学的地理教育」については，白井哲之「地理教育の歩みと日本地理教育学会」『新地理』47-3・4　35-44 頁において定義されている。

58 前掲 35）

59 田中啓爾『地理教育に関する論文集（再増補版）』　目黒書店　1993

60 前掲 20）　125-128 頁